

開催地名：東京都稲城市	
開催日時	令和2年2月16日（日） 10：00 ～ 11：30
開催場所	稲城市消防本部稲城消防署
語り部	武蔵野 美和 （岩手県陸前高田市）
参加者	稲城市消防本部防災課、市内自主防災組織 約100名
開催経緯	本市では、震災時は地域住民である自主防災組織が主体となり、自主防災組織の方々が避難所設営・運営ができるようにマニュアルの作成や訓練を通じて自主防災力の向上に努めている。しかしながら、自治会・マンション管理組合単位の自主防災組織は、役員が1～2年で交代するケースが多く、避難所設営・運営に関するエキスパートの養成が課題となっている。また、過去の震災において、避難所において女性の被災者に対する配慮がなされていなく、ハラスメント被害があったなどの問題が指摘され、女性視点の避難所運営が必要不可欠とされているものの、自主防災活動への女性参加が少ないことが課題となっている。今回はこれらの課題解消に向け、女性の語り部の講演を実施した。
内容	（１）はじめに 私が住む陸前高田市は岩手県南部の太平洋側に位置している。岩手県の中では比較的温暖な地域で、東北の湘南とも呼ばれている。この陸前高田市は、皆様ご存知のように東日本大震災で津波の被害を受け、街が壊滅してしまった。本日は生活者の視点からの避難所運営についてお話しさせていただきたいと思う。 （２）東日本大震災の被害状況 皆様ご存知のように、三陸沿岸は昔から津波の被害を受けてきた。さかのぼれば明治三陸大津波や昭和三陸大津波、チリ地震の津波の被害が有名である。これらの津波被害を受けて対策が講じられてきたにも関わらず、また、情報網が整備されていたにも関わらず、東日本大震災では多くの犠牲者を出してしまった。市内の公共施設についても、市庁舎や図書館、体育館、公民館、小中学校や保育所等々の多くの施設が全壊してしまった。人口24,246名のうち、死者・行方不明者は1,757名にのぼる。3月11日、私は当時中学校のPTA会長を務めており、体育館の落成式のため体育館にいた。地震の揺れは立ってられないほどのもので、長時間に渡って続いた。幸い中学校にいた生徒たちは全員無事であったが、「自分は大丈夫だ」という正常性バイアスが働くと、過去の大津波を体験している人でも逃げない人が多くいた。地震が発生してから津波が押し寄せるまでの40分間、逃げた人と逃げなかった人では大きな差が出てしまったという現実がある。

	(3) 避難とは 陸前高田市では、避難場所の半数以上が被害に遭った。釜石の奇跡の裏で、鵜住居の悲劇というものがある。鵜住居地区では、訓練時に使用していた鵜住居地区防災センターという場所に多くの方が避難した。しかし、実は防災センターは指定避難所ではなかった。避難所だと思い込んでしまった人たちが多く犠牲になってしまったのである。皆が逃げることはできなければ避難ではない。要支援者を含む訓練をしているだろうか。陸前高田市ではそういった訓練が行われていなかったために、多くの犠牲者を出してしまった。日頃から「万が一」を考え、自分の命を守るための「備え」を意識していただきたいと思う。 避難所での避難生活では、一般的な備えしかない。アレルギーに対応した食品や、赤ちゃんのミルク、個々の病状に応じた薬等、個人にとっては必須のものでも、全体では特殊なものについては用意されていないのが現実である。対応できなければ困ることは自分で備える必要がある。一時避難時の食事についても、個々で確保するのが基本である。 (4) 自助の大切さ 行政を頼りにするのではなく、地域を知る皆さんでより良い町にしてほしい。お互いがお互いを支え合い、それぞれがリーダーとなってほしいと思っている。今できる自主防災活動をして、安全に暮らすためにはどうすれば良いか、言い合える関係づくりをしてほしい。それが、自主防災活動が有意義になっていく1つのきっかけになる。 最後に、家族で落ち合う場所を確認しておくことや、自助としての避難グッズを準備しておくことをお薦めしたい。また、普段から少し多めに食材、加工品を買っておき、使ったら使った分だけ新しく買い足していくことで、常に一定量の食料を家に備蓄しておく「ローリングストック」もお薦めしたい。守りたい人がいるなら、まず自分の身の安全を確保することを意識していただき、救助される側から救助する側になれるよう意識した準備を行っていただけたら幸いである。  
開催地より	防災士としてもご活躍されている語り部のお話は、東日本大震災の体験談のみでなく、避難についても非常にわかりやすかった。今後の防災活動の参考にしていきたいと思う。